

● 映画 ● 『東京クルド』

日本が難民条約に加入して今年で40年になるが、いまだかつて難民認定されたトルコ国籍のクルド人は一人もいない。在留資格がもらえず苦悩するクルド人の若者たちの姿を5年にわたって撮影したドキュメンタリー映画

『東京クルド』は、外国人との共生を拒む日本という「国家」の「ゆがみ」を映し出す。トルコで生まれ、小学校に上がった頃に、親に連れられて日本に逃げてきた二人のクルド人青年。オザン(18)とラマザン(19)は、母国トルコのことほあまり覚えていない。今や日本が、彼らの「母国」で、日本社会が2人の「人生の舞台」になっているのだ。しかし、法務省・出入国在留管理庁(以下・入管)は何年たっても彼らを難民として認めず、在留資格を与えない。彼ら

は「仮放免」の身のままなのである。来日当初、当然二人は日本語が全く分からなかった。学校ではいじめの標的にされたが、それでも、彼らはその苦境に耐え続けた。そして必死になつて日本語を覚えて、日本社会に自分の「居場所」を見つけてよ

うと、もがいてきたのだが、そうした彼らの行く手には、いつも、「仮放免」という、入管が与える「身分」の壁が立ちはだかる。③入管が許可しない限り、居住する都道府県を出ることはできない



© 2021 DOCUMENTARY JAPAN INC.

「正規滞在の外国人」に對して入管の收容施設外での生活を認める制度。しかし、①就労が禁止され、②国民健康保険には加入できず、

「仮放免」といふ「身分」は、人間として「最低限度」の生活や、安心安全で安定した生活を送るといふ、基本的な人権を認めない大きな「壁」なのである。どんなに才能があり、またどんなに勉強しても、「仮放免」のままならば、彼らは就職もアルバイトもできないのだ。「未来」が見えない現実の中で、オザンとラマザンは、それでも勉強を続ける意味を見いだすことができないのだろうか。

「ほかの国に行つてよ。どこか他の国にさあー」映画は、難民認定率が極端に低い日本社会風。5919一五四一(東京公開。詳細は80三

い。また、常に「入管收容」と「強制送還」におびえ、その恐怖感には精神に大きなストレスを与える。

「苦しみの中で、必死に『希望の灯』を燃やそうと日々、頑張つて生きている青年たち、入管職員がこう言い放つ。

「入管收容施設での医療放置の問題、また入管が難民認定申請者を追い出すための『いやがらせ』など、日本国民のほとんどが知らない『日本社会の裏の顔』をあぶり出す。7月10日より東京・渋谷のシアター・イメージフォーラム、大阪の第七藝術劇場にて上映予定。以後、全国順次公開。詳細は80三